

日本のいちばん長い日

2016年8月24日 伊澤正之

例年、8月15日が近づくと、TVや新聞などで、昭和20年に終結した戦争に関する番組や特集が組まれる。半藤一利原作の、映画「日本のいちばん長い日」が放映された。平成27年版ではなく、昭和45年版のモノクロの岡本喜八監督によるものである。見終わった後で、気になった箇所があったので、原作を読み返してみた。かなり原作に忠実に映画化されたことが分かった。黒沢年男演ずるところの畑中健二少佐は、いささかオーバーアクションではないか、との印象を受けたが、原作から外れていた訳ではなかった。あとから考えると、単なるミスキャストで、陸大出の畑中少佐の役をあの黒沢年男に振ったのが間違いだっただけの話だった。椎崎二郎中佐を演じた中丸忠雄ははまり役だと感じた。

また、藤原彰著「飢死にした英霊たち」も読み返した。著者の推計によれば、十五年戦争での病死者、戦地栄養失調症による広い意味での餓死者は、合計で127万6240名に達し、全体の戦没者212万1000名の60%強にのぼるとのことである。そのなかの一文を引用する。「戦死よりも戦病死の方が多し。それが一局面の特殊な状況では、戦場の全体にわたって発生したことが、この戦争の特徴であり、そこに何よりも日本軍の特質をみることができる。悲惨な死を強いられた若者たちの無念さを思い、大量餓死をもたらした日本軍の責任と特質を明らかにして、そのことを歴史に残したい。大量餓死は人為的なもので、その責任は明瞭である。そのことを死者に代わって告発したい。それが本書の目的である。」

ここまで読まれた方は、法曹人口問題にも法曹養成問題にも関係ない記述ではないか、と思われるかも知れません。実は、私は常々、司法改革の失敗に目をつぶり、既定路線にしがみついている日弁連執行部は、大戦末期の戦争指導部と同じではないか、と感じているからです。大本営発表という言葉があります。未だ死語にはなっていません。破綻した法科大学院構想、裁判員裁判制度、激減する法曹志望者等々の現実に目を背け、その場しのぎの言葉をつないでいるのは、正に大本営発表と言っても過言ではないと思う。

では、司法改革の問題で、「日本の一番ながい日」は来るのでしょうか。十五年戦争との比較で言えば、ポツダム宣言が出され、広島・長崎に原爆が投下され、ソ連の参戦により初めて無条件降伏の決断があった。これに比べて、司法改革の失敗は、そこまでは可視的ではなく、また期限を切られてはいない。しかし、戦前と比べれば、憲兵隊もなく、特高警察も存在しない。自由な言論が存在する余地がある。日弁連においては、いまだ形式的ではあるが民主的手続きは残されている。最大の敵は、諦めであると思う。諦めずに正論は発し、一人ずつでも同志を増やし、多数派を形成することにより、「日本の一番ながい日」が実現すると考える。